

成育だより

NCCHD
News Letter
2026 Autumn

Vol.48

National Center for Child Health and Development

<https://www.ncchd.go.jp>



特集
アレルギー

ICWH 女性の健康政策研究部・女性の健康医学研究部・不妊症と「免疫」について

医事法制研究部 / 臨床研究センター / 専門職のご紹介(採血室) / 新任のご挨拶

ホスピタル・ファシリティドッグ® マサ&マナ / 小児系診療科 初診受け入れ年齢を18歳まで拡大 / Information

ナッツ類アレルギーが増えている!?

食物アレルギーの三大原因といえば、以前は「卵・牛乳・小麦」がよく知られていました。ところが近年、日本ではクルミやカシューナッツなどの「木の実類(ナッツ類)」によるアレルギーが急速に増えています。全国調査では、ナッツ類は即時型食物アレルギーの原因として、鶏卵に次ぐ第2位となるほど多く報告されています。幼児期から発症することもあり、初めて食べたときに症状が現れる場合もあります。

食物アレルギーでは食べた後に、口の中の違和感、じんましん、腹痛、嘔吐、咳などが現れる場合があります。特にナッツ類アレルギーでは、少量でも重いアレルギー症状を引き起こすことがあるため注意が必要です。なお、ピーナッツは名前に「ナッツ」と付きますが、植物の分類では豆の仲間です。ココナッツもヤシ科の果実で、一般にはナッツ類とは区別されます。

なぜナッツ類アレルギーが増えているのか? まだ詳しくは分かっていません。健康志向の高まりにより、ナッツ類がお菓子やパン、シリアル、植物性飲料などに幅広く使われるようになり、家庭や生活環境の中で触れる機会が増えたことが関係している可能性があります。特に乳幼児では、湿疹などで荒れた皮膚に食物成分がさらされることで、その食物をアレルギーの原因(アレルゲン)として体が覚えるきっかけになると考えられています。

一方で、必要以上にナッツ類を怖がる必要はありません。大切なのは、湿疹やぜん息などの症状を適切に治療すること、そして食べ始めるタイミングを不自然に遅らせないことです。ただし、硬い豆やナッツ類には窒息や誤嚥の危険があるため、5歳以下の子どもにはそのまま与えないよう、消費者庁などが注意を呼びかけています。乳幼児に与える場合は、砕いたり、ペースト状など食べやすい形にして、ごく少量から始めます。ご心配な場合や、すでに食物アレルギーが疑われる場合などは、医療機関に相談しましょう。

Tatsuki Fukuie

福家 辰樹

アレルギーセンター センター長
子どもの頃の夢: 漫画家×町医者



持っているのは、アレルギーでアナフィラキシーを起こした際に、アドレナリンを投与する注射薬と点鼻薬

おしえて！先生！

Q1.

食べさせたことがないのに
発症することがあるのですか？



A1.

食物アレルギーのなりやすさには、遺伝的な体質だけでなく、乳幼児期の湿疹、食生活や環境など、さまざまな要因が関係します。湿疹で皮膚のバリアが弱っていたり、鼻炎やぜん息などで気道にアレルギーの炎症があると、家庭のほこりなどに含まれる食物の成分が皮膚や粘膜から入り、食べる前からアレルギーの準備が進む可能性があります。もちろん原因は1つではなく、何かが悪かったということではありません。湿疹を早めに適切に治療し、皮膚をよい状態に保ち、食べ始めるタイミングを不必要に遅らせないことが大切です。

アレルギーセンターについて

アレルギーセンターでは、複数の診療科が連携し、食物アレルギーやアトピー性皮膚炎、ぜん息など、さまざまな小児アレルギー疾患を診療しています。患者さんやご家族への指導や相談、アレルギーの予防、より良い治療につなげるための研究にも取り組んでいます。

国立成育医療研究センター アレルギーセンター

<https://www.ncchd.go.jp/hospital/about/section/allergy/>

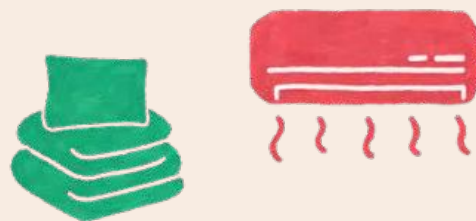


Q2.

秋になると、ダニアレルギーの症状が悪化しやすいのはなぜですか？

A2.

ダニアレルギーは一年を通して起こりますが、梅雨以降、特に秋に症状が悪化することがあります。高温多湿の夏に増えたダニのフンや死骸が、秋になると室内のほこりに多く含まれるためです。これらを吸い込むと、鼻水・鼻づまり、目のかゆみ、咳やぜん息などが起こることがあります。寝具の掃除機掛けをする、高密度繊維布団カバーを活用する、部屋の湿度を上げすぎないなど、無理のない範囲で室内環境を整えましょう。衣替えや、暖かい布団を出す前には丸洗いすることもお勧めです。気になる症状が続く場合は、医療機関にぜひご相談ください。



1.

どのくらいの量でアレルギー症状が出る？

食物アレルギーでは、同じ食べ物でもどのくらいの量で症状が出るのかは人によって大きく異なります。そこで近年、患者さんの何%が、どのくらいの量で症状を引き起こすのかを統計的に調べる研究が進められています。

例えば当科の調査では、鶏卵は約0.2gであれば95%の卵アレルギー患者さんが大きな症状なく食べられ、4gでは約半数の患者さんに症状が出ることが分かっています。さらに、クルミアレルギー患者さんは2019年以前と比べて、より少ない量で症状が引き起こされる傾向になっています。こうした研究は、食物経口負荷試験をより安全に行う方法や、食品表示の基準を考えるためのエビデンスとして役立てられます。

2.

食物アレルギーチェックリスト

気になる項目がいくつかある場合は、小児科や専門医に相談しましょう。

A 食後の症状

- ☐ じんましんや赤み、かゆみが出る。
- ☐ 唇やまぶたが腫れる。
- ☐ せきをしたり、ゼーゼーしたりする。
- ☐ おう吐やおなかの痛み、下痢の症状がある。
- ☐ 特定の食べ物で、機嫌が悪くなる。

B 体質

- ☐ 皮膚が乾燥しやすく、湿疹が出やすい。
- ☐ 季節や環境(ほこり・花粉など)に反応して、Aのような症状が出る。
- ☐ 同じ食べ物で、何度かAのような症状が出たことがある。
- ☐ 家族にアレルギー体質の人がいる。

女性の健康政策研究部

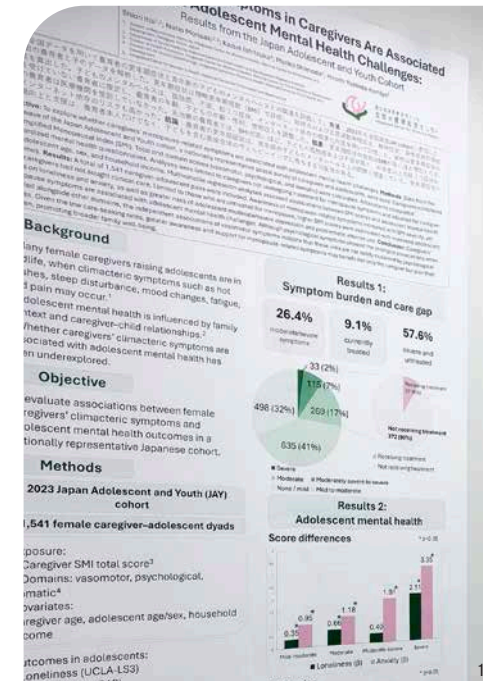
女性の健康政策研究部では、女性が生涯を通じて健康に過ごせる社会の実現を目指し、女性特有の健康課題や男女で違いがみられる健康課題について研究しています。

- 小児期から老年期まで、女性の生涯を通じて健康状態や健康課題を調べ、その要因や解決方法を明らかにする
- 研究から得られた科学的な根拠を、国などの健康政策に生かすため、研究や提言を行う
- 国内外の女性の健康に関する政策や取り組みについて情報を集め、活用できる仕組みをつくる

● 思春期や若年期など、心身や生活環境が大きく変化する時期に着目し、医学だけでなく社会学など幅広い視点から健康課題を研究する

● デジタル技術やさまざまなデータを活用して健康課題を分析し、より良い医療や健康づくりにつながる情報発信や支援方法を研究する

このように、女性の健康に関する課題を科学的に明らかにし、その成果を政策や社会の仕組みに生かすことで、性別を問わず、誰もが生涯を通じて健やかに暮らせる社会を目指しています。



Naho Morisaki
森崎 菜穂

女性の健康政策研究部 部長
子どもの頃の夢：小学校の先生

- 1: 学会用ポスター
2: 調査・研究データを解析

女性の健康医学研究部

女性の健康医学研究部では、女性の健康や病気、性差医療（男女により病気の発症に違いがあること）、妊娠・出産に関するさまざまな課題に取り組んでいます。

- 赤ちゃんが早く生まれてしまう早産、そして妊娠中に卵膜が破れて羊水が流出してしまう前期破水の新しい予防法や治療法の開発
- 妊婦さんの血圧が上がってしまう妊娠高血圧症候群の原因となる、赤ちゃんとお母さんをつなぐ「胎盤」の異常を調べる
- 子宮などの婦人科良性疾患について、たくさんの遺伝子・タンパクの動きを一度に解析する最新の分子生物学・情報科学技術を活用して、病気の原因を明らかにする

● 最新の幹細胞・再生医療の技術を使って、ミニ臓器モデルの開発を目指す

● 女性の思春期から老年期までのホルモンの変化を調べて病気を防ぐ
このように、女性の生涯を通じた健康を維持し、病気の発症を防ぎ、また病気を治療するため、日々実験を積み重ねながら、臨床応用に向けた基礎研究に励んでいます。

Haruta Mogami
最上 晴太

女性の健康医学研究部 部長
子どもの頃の夢：エンジニア・大工さん

- 1: 組織の遺伝子発現を測定
2: ヒト胎盤内のマクロファージ（共焦点顕微鏡撮影）



女性内科のご案内

女性のライフステージごとの健康課題に対応し、総合的かつ専門的な内科診療を提供しています。妊娠・出産に関連する内科的な疾患に力を入れています。必要に応じて産科、小児科、関連診療科と連携し、切れ目のないケアを実践します。

—対象疾患—

糖尿病、甲状腺疾患、肥満症、脂質異常症、高血圧、気管支喘息、免疫の関与する不妊・不育症、慢性腎臓病、ワクチンで予防できる疾患 (Vaccine Preventable Diseases) など

不妊症と「免疫」について

原因不明の不妊症により長期間の治療を断念し、心身ともに苦しんでいるカップルも少なくありません。原因不明の不妊症は、不妊症全体の10～15%を占め、その一部には母体の免疫が関与していると考えられています。

免疫は本来、体内に入ってきた異物を排除する働きがあります。

一方、子宮内では母親と父親の両方の遺伝情報をもつ受精卵を受け入れる特別な免疫のメカニズムも働いています。

排除の働きは臓器移植、受け入れる働きはがんの免疫学に代表され、この10年間で急速に解明が進んできました。妊娠の免疫学は両者を含み、近年の研究から、免疫が関係している不妊症は受精卵を受け入れる働きよりも

排除する働きが強くなることが分かりました。

当センターでは、こうした不妊症に対して、免疫の働きを抑える薬「タクロリムス」を使った治療法の研究開発をしています。これまでの研究では、良好な胚を複数回移植しても妊娠に至らず、免疫の関与が認められた患者さんにタクロリムスを使用したところ、約60%が妊娠することができたという結果が出ました※。

原因不明の不妊症で悩んでいる方は、免疫学的な検査をしてみることをお勧めします。

※タクロリムスを用いたこの治療法は、厚生労働省の第180回先進医療技術審査部会で「安全性が高く有効な治療」と判断されましたが、まだ薬事承認されておらず、自費診療となります。

不妊症の新たな治療につながる研究として、「タクロリムス」の安全性と有効性を検証しました。



子どもの頃の夢は
人を救う人になること!



Koushi Yamaguchi
山口 晃史

女性総合診療センター
女性内科 診療部長

臨床研究センター

私たちの体には、ウイルスや細菌などの異物から身を守る「免疫」という仕組みがあります。本来は体を守るために働く免疫ですが、花粉や食べ物など、本来は害のないものに対して過剰に反応し、さまざまな症状を引き起こすことがあります。こうした免疫の反応が、アレルギー疾患に深く関わっています。

近年、アレルギー疾患には、免疫の過剰な反応だけでなく、免疫の働き過ぎを抑える「制御性T細胞 (Regulatory T cell:Treg)」が関係していることがわかってきました。

現在、このTregを治療に活用する研究が進められています。なかでもiPS細胞からTregをつくる技術や特定の対象に働くようTregの機能を高めた「CAR-Treg」などの技術が注目されています。これらは症状を抑える治療とは異なり、免疫システムそのものを再構築することで、アレルギー疾患の根本的な治療につながる新たな方法として期待されています。

Naoko Nakamura
中村 直子

臨床研究センター 研究推進部門
プロジェクトマネジメントユニット
ユニット長
子どもの頃の夢:
野生動物の獣医さん



声が世界中から上がりました。日本では、今年7月に、ようやくゲノム編集ベビーの誕生を禁止する法律が制定されました。私たちの研究部では、この法律案の策定過程にも関わってきました。

私たちは、研究の成果を法政策や仕組み作りにつなげ、より良い社会の実現に貢献していきたいと思っています。



Ayako Kamisato
神里 彩子

医事法制研究部 部長
子どもの頃の夢:
フィギアスケート選手

また、新しいタイプの研究の中には、「倫理的にどうなんだろう?」とか、「やるとしても、ルールが必要なのでは?」と人々が不安や疑問を抱くような研究もあります。例えば、2018年に、「ゲノム編集技術」という新しい技術を使って受精胚(細胞分裂を始めた受精卵)のゲノムを改変し、双子の女の子が生まれた、との発表が海外の研究者からありました。これに対して、「安全性の検証が不十分な技術を使って新たな命を誕生させるべきではない」とか、「親の意向で、受精胚のゲノムを改変することは非倫理的では?」といった批判の

そのため、研究に協力する／しないを患者さんや保護者の方が自由に決められることや、研究開始前に十分に審査がなされていることなどが重要になります。私たちの研究部では、「新しいお薬や治療法を早く患者さんに届けること」と「研究にご協力いただく方々の権利を保護すること」という二つを両立させるために必要な法政策や仕組みに関する研究をしています。

新しいお薬や治療法の開発には、たくさんの方の細胞や医療情報を使います。また、お薬の候補ができた場合には、それを患者さんに使っていただき、お薬の安全性や効き目を研究することが必要になります。分からないことを明らかにするための研究なので、残念ながら、患者さんに直接的なメリットがなかったり、あるか分からなかったりすることが多いです。





国立成育医療研究センター
もみじの家 ハウスマネージャー

Takeshi Yamazaki

山崎 剛

子どもの頃の夢：
いろいろ発明して楽しく暮らしたい

このたび、7月1日付でもみじの家のハウスマネージャーを拝命いたしました山崎剛です。私は、もみじの家のご利用者一人一人の思いや個性を尊重し、安心して自分らしく暮らせる環境づくりに努めてまいります。また、ご家族の皆さまにも安心していただけるよう、丁寧なコミュニケーションを心掛け、信頼関係を築いていきたいと考えております。日々緊張感を持ちながらケアを提供しているスタッフが互いに支え合い、安心して力を発揮できる、温かい職場環境づくりにも取り組んでまいります。利用者、ご家族、スタッフの皆さんが笑顔で過ごせる「もみじの家」を目指し、誠実に努めてまいります。まだ至らぬ点もございますが、ご指導とご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



国立成育医療研究センター
研究所 副所長

Hidenori Akutsu

阿久津 英憲

子どもの頃の夢：
野口英世のようになること

2026年7月1日付で研究所副所長を拝命いたしました。産婦人科医として臨床に携わったのち、ヒトの発生と再生の仕組みに惹かれ、研究の道に入りました。以来、iPS細胞・ES細胞やオルガノイド(本物の臓器に近い構造や機能を持たせた「ミニ臓器」)を使った再生医学研究に取り組んでいます。研究所には多様な研究者が集まっています。分野を越えた連携を深めるとともに、病院や女性の健康総合センターなど各部門と協力し、研究成果を子どもとご家族へつなげていきたいと考えています。深見所長のもと、若い研究者が意欲をもって研究に取り組める環境づくりにも力を注ぎ、研究所の発展に力を尽くしてまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。



採血室では、診断や治療に必要な血液検査のための採血を行っています。訪れる患者さんは1日平均約150人。乳幼児の採尿バッグの貼り付けなども担当しています。

子どもの採血で難しいのは、血管が細く見つけにくいことだけではありません。「痛い」「怖い」という気持ちから、腕を引いたり体を動かしたりすることもあります。わずかな動きでも採血が難しくなるため、安全に行うには、採血の技術とともに、子どもの不安を和らげることが大切です。

採血室では、針を見えないようにしたり、好きなものの話をしたり、ブースにある間違い探して気をそらしたりと、一人一人に合わせて工夫しています。泣くことを否定せず、「お部屋に入れたね」「腕を出せたね」と、できたことを一つずつ認めることも大切にしています。

また、子どもの「自分でやってみたい」という気持ちも尊重します。これまで保護者の膝の上で採血していた子が、採血しない方の手を握ってもらっただけできるようになるなど、その日の様子や成長に合わせ、安全を確保しながら介助の方法を調整しています。安全に採血するため、

必要に応じて採血するスタッフと介助するスタッフが役割を分担し、声を掛け合いながら対応します。以前は一人でできなかった子ができるようになる姿や、採血後に「痛くなかった」「ありがとう」と笑顔を見せてくれることは、スタッフにとって何よりの喜びです。

ご家庭でできること

採血の予定があるときは、採血することを隠さず、年齢に合わせて事前に伝えてあげてください。「痛くないよ」とごまかすのではなく、「少しチクツとするけれど、すぐ終わるよ」「体のことを調べるために必要な検査だよ」と伝えることで、心の準備ができます。

小さなお子さんなら、家で腕を出す、親指を中に入れて手を握る、といった練習をしておくのもおすすめです。採血が終わったら、泣いたかどうかや、うまくできたかどうかにかかわらず、「頑張ったね」「終わったね」とたくさん褒めてあげてください。

Yoshiharu Kunugi

棚 好陽

臨床検査技師
子どもの頃の夢：
消防士



マナの研修風景

来年、当センターで2チーム目のホスピタル・ファシリティドッグとして就任予定の「マナ」が、現在、院内で実地研修に取り組んでいます。マナと、院内でともに活動する新しいハンドラーは、7月に専門研修の最終評価をクリアし、実地研修期間に入りました。ハンドラーは、マナの体調や様子を見ながら、患者さんとの関わりをサポートする大切なパートナーです。現在は一つの病棟を中心に、患者さんのもとを訪問しながら、経験を重ねています。まずは週3日・半日程度の活動からスタートし、犬とハンドラーのチームを専門的に指導・支援するトレーナーのフォローを受けながら、数か月かけて少しずつ活動時間を広げていく予定です。

先輩のホスピタル・ファシリティドッグ「マサ」とも仲良しのマナ。来年からはハンドラーとともに新たなチームとして本格的に活動します。どうぞ楽しみにお待ちください。

マサ先輩
よろしくお願いします！



マサ&マナの夏休み

暑い夏、マサとマナも夏休みを満喫しました。暑い夏、マサとマナも夏休みを満喫しました。広い芝生を元気いっぱいに走ったり、プールではおもちゃをくわえて仲良く泳いだりしました。ひまわり畑では、一緒に記念撮影も。暑さ対策もしながら、夏ならではの時間を楽しみました。



Hospital Facility Dog Mana

マナ

犬種：ゴールデン・レトリバー
誕生日：2024年3月8日生まれ♀



Hospital Facility Dog Masa

マサ

犬種：ラブラドル・レトリバー
誕生日：2019年3月7日生まれ♂



小児系診療科 **初診** 18 AYA 世代 歳まで 受け入れています



理事長 五十嵐 隆より

人のBiopsychosocial health and well-beingは胎児期から成人期に至るまでのライフコース全体で規定されます。これを実現するため、国立成育医療研究センターでは「子どもの病気を主に診る小児医療」から「胎児期・小児期・思春期さらに成人移行までを含む人生全体を支える成育医療」に発展させます。今まで日本では手薄だった思春期の子どもたちの医療にも貢献してまいります。

小児科・思春期医学専門医 エリザベス(リズ)・ミラーより

思春期は、子どもから大人への人生の大きな移行期です。成育医療研究センターが18歳まで初診を受け入れることは、この大切な時期にある若者たちへの責任を果たそうとする意思の表れだと感じています。若者とご家族に対して、「皆さんも成育の一員であり、質の高い医療と支援を受ける権利がある」というメッセージでもあります。私たちは、若者たちが健康で自立した成人期へ移行できるよう、身体面だけでなく心理面・社会面も含めて支えていきたいと考えています。



国立成育医療研究センターでは、思春期の子どもたちを支える医療「思春期医療」を推進するため、小児系診療科の初診受け入れ年齢を、これまでの15歳から18歳までに拡大しました。

思春期や若年成人(Adolescent and Young Adult: AYA)世代は、からだだけでなく、心や周囲との関係も大きく変化する時期です。特に15～18歳は、自立に向かう一方で、生活や受診については保護者の支えを必要とする場面も多くあります。また、医療機関を受診する機会も少なく、いざ受診が必要となった際にどこに相談したらよいかわ迷われることも少なくありません。

そこで当センターでは、初診受け入れ年齢を18歳まで広げることで、小児医療と成人医療の狭間で必要な支援が届きにくくなることを防ぎます。身体面はもちろんのこと、心理面・社会面にも配慮し、必要に応じてセンター内の専門診療科と連携しながら「思春期医療」の充実に取り組みます。

私たちは、思春期の子どもたち一人一人の状況に寄り添い、子どもたちが安心して大人へと成長していける医療と社会を目指していきます。



小児系診療科の初診受け入れ年齢を
18歳まで拡大しました！

臓器移植センター

ブラック・ジャックセミナー
開催報告

7月18日、ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社と共同で「ブラック・ジャックセミナー」を開催しました。午前小学生、午後は中学生を対象に、当センターの医師の指導のもと、超音波検査や腹腔鏡手術、AEDを使った救命処置、縫合など、外科医の仕事を体験。子どもたちは真剣な表情で一つ一つの体験に挑戦し、最後に「未来の医師認定証」を受け取りました。40名の定員に対して約1,000名の方からお申し込みいただきました。たくさんのご応募、ありがとうございました。

もみじの家

もみじの家に
移動式プラネタリウムが
やってきました

8月21日、歌手のMISIAさんとファンの皆さまのご支援により、もみじの家で移動式プラネタリウムの鑑賞会が開催されました。ドームの中いっばいに広がる星空を、ごろんと寝転びながら眺め、宇宙を身近に感じる特別な時間となりました。車いすやバギーに乗ったままでも鑑賞でき、普段はなかなかいけないプラネタリウム体験に、笑顔や歓声があふれていました。

センター

今年も「おりがみツリー」を
開催します

「おりがみツリー」は、こどもと、こどもに関わる皆さんが折った折り紙を集め、大きなクリスマスツリーを作る企画です。「こどもの力を、目に見える形で発信すること」をコンセプトに、今年で15年目を迎えます。今年もツリー制作に向けて、皆さんから折り紙作品を募集します。作品はどのようなものでも構いません。メッセージを添えるなど、自由にお楽しみください。応募は11月27日(金)必着。送付先など、詳しくはおりがみツリー運営事務局(origamitree@ncchd.go.jp)までお問い合わせください。

ファンドレイジング室

成育オリジナルの
寄付型自販機が登場

このたび、当センターへの寄付につながる「寄付型自販機」を設置できるようになりました。センターのア트워크を手がけた舟橋全二さんの作品をあしらった、成育オリジナルの自販機です。自販機の売り上げの一部が当センターに寄付される仕組みで、子どもたちのための医療や研究、療養環境の充実などに役立てられます。自販機の設置を通じてご支援をご検討いただける方は、寄付担当(kifu@ncchd.go.jp)までお問い合わせください。



ご意見・ご感想

『成育だより』へのご意見・ご感想、
また取り上げてほしいテーマがありましたら、
QRコードからぜひお気軽にお送りください。

広報誌「成育だより」
最新号に関するアンケート



女性の健康総合センター



女性の健康総合センター開設2周年活動報告会開催のお知らせ

女性の健康総合センターは、2026年10月に開設2周年を迎えます。これを記念し、これまでの取り組みや成果について広く知っていただくため、11月20日(金)に活動報告会を開催します。当日は、国立成育医療研究センターの診療部門との連携を中心にご報告する予定です。関心のある方はどなたでも、オンラインでご参加いただけます。詳細はウェブページをご覧ください。皆さまのご参加をお待ちしております。



「大好きなハンバーガーを独り占めして食べたい！」いつも思っている感情を、図鑑で見つけたバクの姿に重ねて一気に描きました。描き終えた気持ちは「満腹」です。

表紙の絵について

当センターでは、さまざまな個性を持った方々との共生を目指して、表紙イラストに障がいのあるアーティストのイラストを採用しています。思わずクスッと笑ってしまう作品、目を見張るような作品など、魅力あふれる作品をご紹介します。2026秋号は、アートビリティ所属、祐谷敦志さんの作品です。

描いた人：

祐谷 敦志

作品名：

「うらやましいだろう」



アイノカチ基金

ご寄付について

子どもたちの命を守るための医療機器の整備や、療養環境の改善のためにご寄付をいただけるとありがたく存じます。当センターへの寄付は税制上の優遇措置（寄付金控除）を受けることができます。詳細はHPをご覧ください。



<https://www.ncchd.go.jp/donation/>



国立成育医療研究センター お問い合わせ

医療関係者の方

医療連携室

直通 03-5494-5486(月～金8:30-16:30)

救急センター

代表 03-5494-7073(24h受付)

NICU

代表 03-5494-7750(24h受付)

母体搬送

代表 03-5494-7550(24h受付)

PICU

代表 03-5494-7120(内線7070)(24h受付)

患者さん・ご家族

予約センター

病院 03-5494-7300(月～金9:00-17:00)

産科 03-5494-8141(月～金9:00-17:00)



国立研究開発法人

国立成育医療研究センター

National Center for Child Health and Development